Osaka University Knowledge Archive

Title	ミシェル・ルグランの映画音楽 : その機能についての一考察
Author(s)	倉田, 麻里絵
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 64-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71187
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ミシェル・ルグランの映画音楽 ── その機能についての一考察 ──

倉田麻里絵　関西学院大学大学院研究員

はじめに

1950年代から多くの映画音楽を手がけているミシェル・ルグラン（Michel Legrand, 1932-）は，戦後のフランス映画を代表する作曲家の１人である。しかし，彼の映画音楽に関する評価や先行研究の大部分は，彼が音楽を提供した映画の作品論やその映画監督の作家論の研究を補助するかたちで語られてきた。もとより，映画音楽は映画作品の一要素であり，作曲家は映画制作において従属的な立場にある。そのため，映画研究からその作品の音楽監督（作曲家）の作家性のみを抽出すれば，それは的外れになりかねない。

そこで，本発表では映画の制作過程においてルグランの意思が反映されていると確認できるものの中から，ノーマン・ジュイソン（Norman Jewison, 1926-）監督の『華麗なる賭け（*The Thomas Crown Affair*）』（1968年）を採りあげた。この作品の音楽について，《風のささやき（The Windmills of Your Mind）》は議論の蓄積があるが，本作の音楽を包括的に検討したものは現時点では確認できない。本発表では，『華麗なる賭け』の音楽を分析することで，ルグランの映画音楽としてのフィルモグラフィにおける本作の再評価を試みた。

１．ライトモティーフ

まず，音楽の手法としてライトモティーフの使用があげられる。本作では２つのライトモティーフが確認できる。

物語の主軸は，富裕層であるトーマスが実行した銀行強盗にまつわることにある。そのため，トーマスに付されたライトモティーフも主に銀行強盗に関わるシーンに登場する。彼にとって銀行強盗とは，社会的束縛から解放されている自身を確認するための作業である。ライトモティーフは，彼が銀行強盗から得るスリルを完全５度の上行で，その高揚感が一時的なものであることを完全５度の枠組みを反転させた完全５度の下行で表している。加えて，トーマスの精神が充足しないことを下行時の音型を半音上げることで示している。

一方，保険会社の調査員ヴィッキーのライトモティーフは，トーマスとの駆け引きのシーンにつけられている。そのため１つの楽曲内で「トーマスのライトモティーフ」と入れ替わり登場する。この２つのライトモティーフの付される順によって，社会的立場に私的な感情を織り交ぜた２人の駆け引きの状況を表している。それが顕著に見えるのは，物語の後半で，デートをする２人の様子を描いたシーンである。ここで流れる楽曲には，それまでに登場した双方のライトモティーフの変奏が次々と登場する。そして，それらはヴィッキーと出会う以前のトーマスのライトモティーフに遡っている。映像では楽しげなデートの様子が示されるが，音楽の配置によってトーマスがヴィッキーとの駆け引きを終わらせることが示されている。

２．ベルの音

本作には特徴的なベルの音がある。ベルの音の初出は，物語の序盤にある。トーマスが雇った銀行強盗の実行犯が，盗難金を指定の墓地まで運送するのを，トーマスが尾行する

シーンで流れる楽曲の中に登場する。この楽曲でベルの音は，強盗計画が成功間近であるという意味の勝利の鐘のように聞こえる。

次にベルの音が登場するのは，この盗難金をトーマスが墓地で回収するシーンである。墓地ではトーマスの車より前景に，墓石に彫られた「心清い人々は，幸いである」（マタイによる福音書５章８節）が示され，トーマスが盗難金に手をかけると墓地内にあるベルが鳴る。そのため，ここでトーマスが聞くベルの音には，警鐘のような役割があることを鑑賞者は容易に把握できる。

つまりベルの音は，勝利の鐘のように響く音から，警鐘のように響く音へ移行していることになる。さらに，尾行のシーンでは「非物語世界の音」の音楽内にあったベルが，トーマスが盗難金に触れる際には音楽から独立し，「物語世界の音」として響いていることにもなる。これらの音楽と音の配置は，トーマスの行動に対する作品の皮肉的な態度を示しているといえる。

３．スキャット

本作でルグランは音楽に，自身のスキャットを大胆に採用したと考えられる。それは，ベルの音の初出でもある，トーマスが実行犯を尾行するシーンで，トーマスが高速道路のトンネルに入ったところから流れはじめる。トーマスの強盗計画は成功目前であるため，彼のそれまでの緊張がやや緩んだことを表すように，スキャットはリラックスした雰囲気をもたらしている。しかし，スキャットが作品にもたらすものは，それだけではない。トンネル内という限られた視覚情報の中で，聞こえるルグランの声は，作曲家としての存在をほのめかしているようにも捉えられる。

映画におけるスキャットの挿入は珍しいことではないが，ルグランのフィルモグラフィにおいては新たな区分となりえる。『ミシェル・ルグラン自伝　ビトゥイーン・イエスタデイ・アンド・トゥモロウ』によると，ルグランは1964年から歌うことに興味を持ち，同年には初のヴォーカル・アルバムを発売している。さらに，彼は映画音楽にもスキャットを含む自身の歌唱を採用しはじめる。1964年以降，ルグラン自身の歌唱が採用されている映画作品は，クレジットの有無はあるものの，現段階で発表者は５本を確認している。それらは，ルグラン自身が映画監督と音楽も担当した映像作品を除けば，他者の映画監督作品では，オープニング・クレジットで流れる楽曲のみの採用や，劇中で控えめに流れる程度である。したがって『華麗なる賭け』は，他者の監督作品において彼の歌唱が強調されるように付されているため注目に値する。

おわりに

『華麗なる賭け』はルグランがハリウッドで手がけた初期の作品である。その作品で，映画音楽の手法としてのライトモティーフをわかりやすく使用したことや，物語世界で強調されている墓地でのベルの音を音楽に採用したことは，映画音楽の作曲家としての技量をハリウッドへアピールしたものとも考えられる。加えて，1964年以降からルグランが継続的に行っている映画音楽における自身の歌唱の採用は，作曲家の「肉声」の挿入として，映画作品内に制作者の存在をイメージ化させたと捉えられる。この件については，今後の課題としたい。

以上のことから，『華麗なる賭け』はルグランのフィルモグラフィにおいて，彼の手法がうかがえる作品として再評価されるべきである。